

参考文献

- 1) Favrot C: *SMALL ANIMAL DERMATOLOGY*, 1(2): 110-114, 2010
- 2) Hill PB et al.: *Vet Rec*, 158: 533-539, 2006
- 3) Prost C: *EJCAP*, 19: 223-229, 2009
- 4) Favrot C, et al.: *Vet Dermatol*, 23: 45-e11, 2011
- 5) Prost C: *Advances in Vet Dermatol*, 3: 516-517, 1998
- 6) Wisselink MA, et al.: *The Veterinary Journal*, 180: 55-59, 2009
- 7) Scott D, et al.: Miller W and Griffin C: *Muller & Kirk's Small Animal Dermatology 6th ed.*, pp603-607, Saunders, Philadelphia, 2001
- 8) Freedom of Information Summary, NADA 141-329, 2011
- 9) 社内資料
- 10) Rush JE, et al.: *J Am Vet Med Assoc*, 220(2): 202-207, 2002
- 11) Smith SA, et al.: *Int J Appl Res Vet Med*, 2(3): 159-170, 2004
- 12) Ployngam T, et al.: *Am J Vet Res*, 67(4): 583-587, 2006
- 13) Lowe AD, et al.: *Vet Derm*, 19: 340-347, 2008
- 14) Clinical Trial Participant Survey: Burke Market Research, May 2001

いつものように過ごす幸せ。

アトピカ
内用液



アトピカ®は、
その使いやすさが認められ、
「fab Easy to Give Award」を
受賞しました。

*fabは、猫を取り巻く医療・福祉環境向上の
ために活動している英国の慈善事業団体です。

製品に関する情報、学術資料等につきましては弊社営業担当者までお問い合わせ下さい。

製造販売業者
ノバルティス アニマルヘルス株式会社
東京都港区西麻布4丁目12番24号

ノバルティスカスタマーサービス TEL 0120-162-419
月～金 9:00～12:00, 13:00～17:00(祝祭日除く)

ATP1209-113-PI

この寝顔、アトピカの証です。



製品特長

世界で初めての猫慢性アレルギー性皮膚炎治療薬です

- ① 有効性 臨床試験において、かゆみの軽減、皮膚病変の縮小が認められ、
また多くの症例で漸減が可能である

アトピカ内用液の効果と漸減について知るには4・5Pへ

- ② 安全性 ステロイド剤の代替薬となりうる

アトピカ内用液の安全性について知るには6Pへ

- ③ 簡便性 投薬コンプライアンスを向上する液剤で直接投与または混餌投与が可能

アトピカ内用液の投与方法とコンプライアンスについて知るには7Pへ

NEW
FOR CATS

いつものように過ごす幸せ。



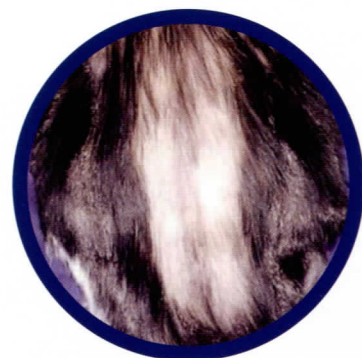
アトピカ
内用液

猫のアレルギー性皮膚炎とは・・・

- アレルギー性皮膚炎は猫において一般的にみられる皮膚疾患であり、通常、環境、食事及び/あるいはノミアレルゲンなど免疫反応を刺激するアレルゲンによって引き起こされ、慢性的で再発性があり、生涯にわたる管理が必要です。
- 多くの罹患猫は3歳齢以前に最初の臨床徴候が現れますが、さらに幅の広い初発年齢を報告した論文もみられます¹⁾。
- 受診例の12%は皮膚関連症状を示し、このうち34%は痒みと脱毛がみられます²⁾。
- 典型的な病変は自傷による脱毛、好酸球性プラーク、粟粒性皮膚炎、頭頸部の表皮剥離(びらんや潰瘍)です³⁾。



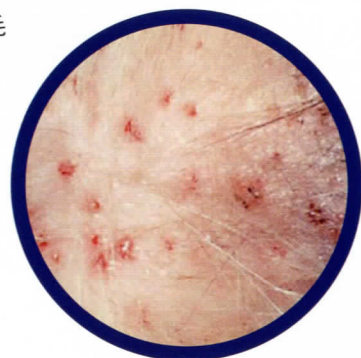
典型的な病変



自傷による
左右対称性脱毛



好酸球性プラーク



粟粒性皮膚炎



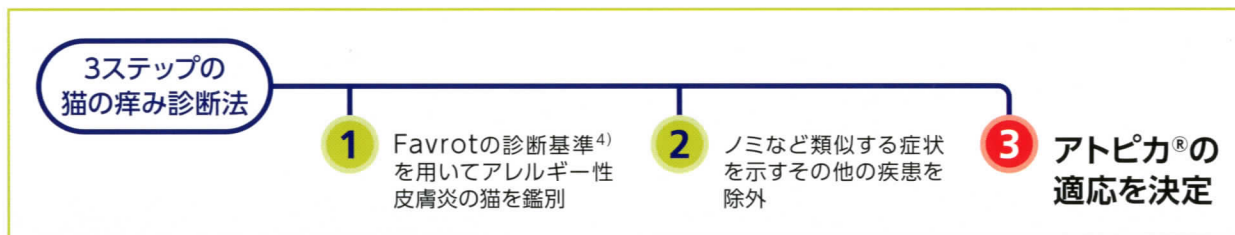
頭頸部の表皮剥離

猫のアレルギー性皮膚炎の診断

猫のアレルギー性皮膚炎に特異的な所見は見出されていません。アレルギー性皮膚炎の診断は、病歴と臨床症状、痒痒など類似する症状を示すその他の疾患の除外に基づいて行います。

ノバルティス アニマルヘルス社では皮膚科専門医*と共同で簡単な猫の痒みの診断法を作成しました。

3ステップの猫の痒み診断法



*Martha Cannon, Rosario Cerundolo, Paul Coward, Chris Dale, Peter Forsythe, David Grant, Andrea Harvey, Sarah Heath, Anke Hendricks, Julie Henfrey, Tim Nuttall, Stephen Shaw

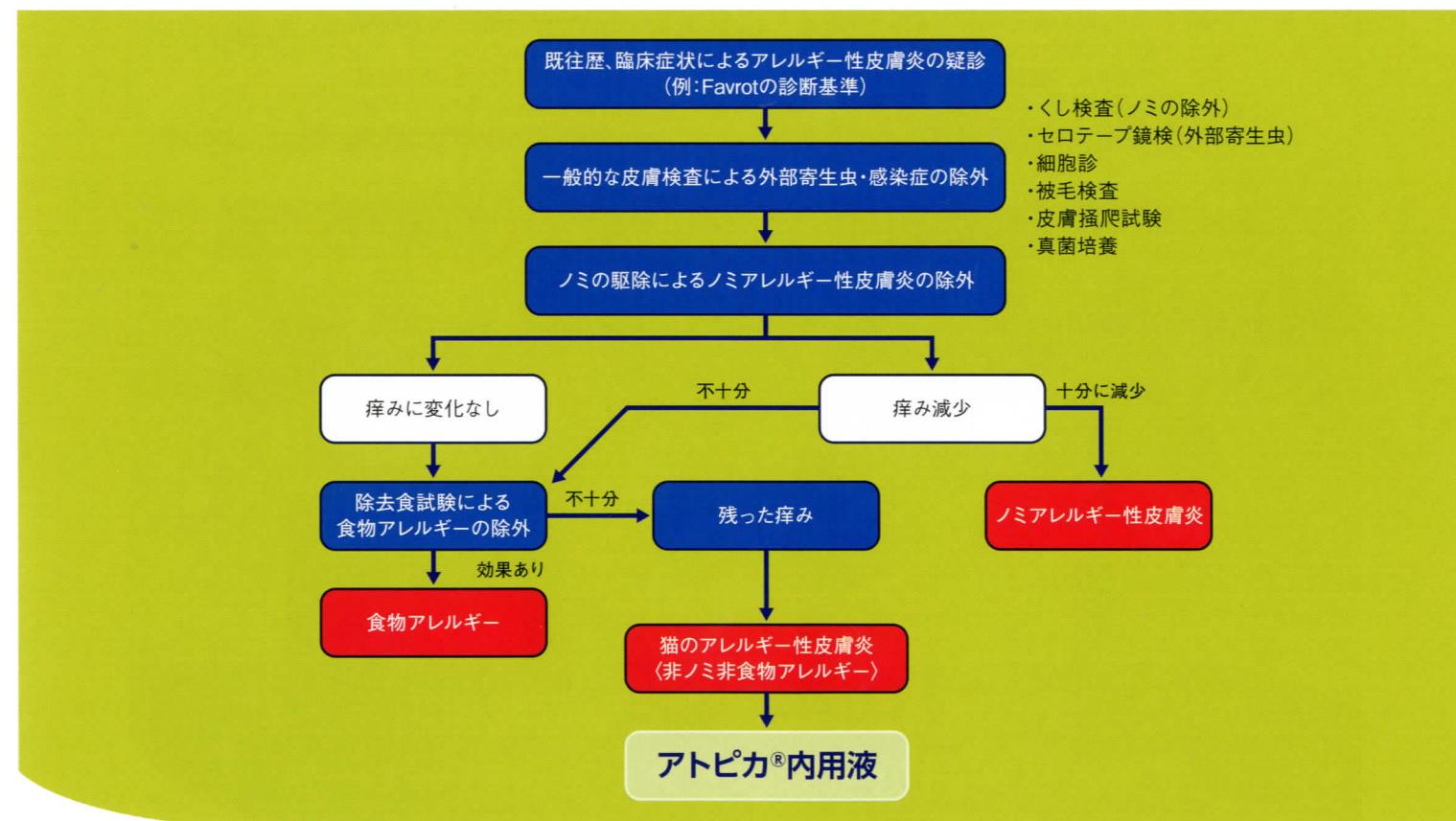
Favrotの診断基準

Favrotにより提唱された猫の非ノミ誘発性過敏性皮膚炎の診断基準
501症例の痒痒と皮膚病変を示す猫の臨床徴候から確立された。

- | | |
|----------------------------|----------------------|
| 1. 2ヵ所以上の病変 | 3. 左右対称性脱毛 |
| 2. 以下の4つの臨床パターンのうち、2つ以上がある | 4. 口唇の病変 |
| - 左右対称性脱毛 | 5. 頸部または頸部のびらんまたは潰瘍 |
| - 粟粒性皮膚炎 | 6. 臀部に病変がない |
| - 好酸球性皮膚炎 | 7. 臀部または尾部に非対称性脱毛がない |
| - 頭部・頸部のびらん/潰瘍 | 8. 結節または腫瘍がない |

以上の8項目のうち5項目を満たす場合、75%の感度と76%の特異性をもって非ノミ誘発性過敏性皮膚炎と診断できる。類似する疾患の除外により、診断精度を上げることも重要である。

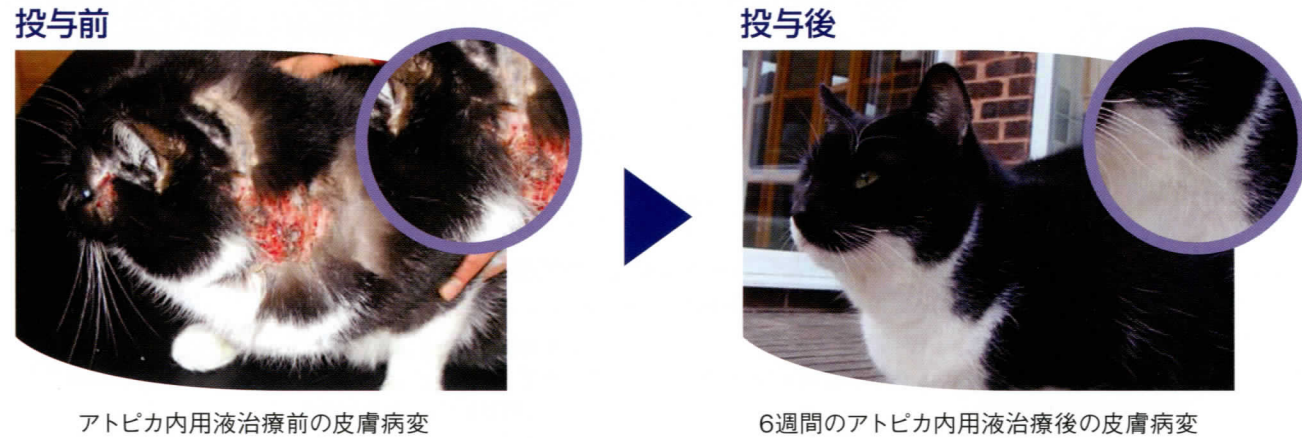
猫のアレルギー性皮膚炎の診断フロー^{4)~7)}



アトピカ内用液は、猫のアレルギー性皮膚炎の症状を効果的に改善します。

痒みを和らげ、皮膚病変を低減します。

- 臨床試験において、痒みの軽減、皮膚病変の縮小が認められています。



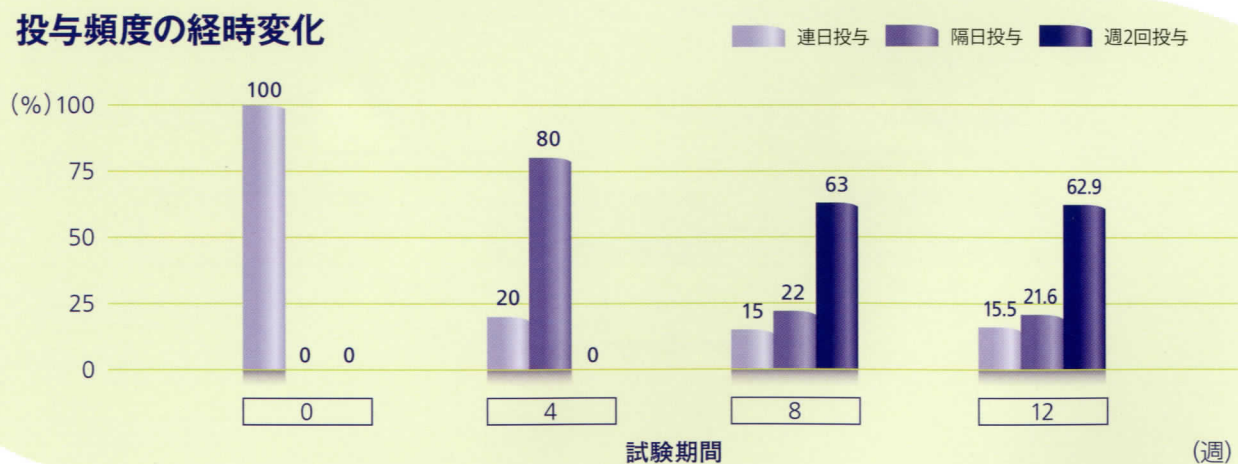
アトピカは多くの症例で漸減することができました⁸⁾。

対象 アレルギー性皮膚炎の1~16歳齢、体重2.3~9.8kgの猫191頭(雄82頭、雌109頭)

方法 シクロスポリン7mg/kgを1日1回4週間投与。その後は症状に応じて4週間ごとに投与頻度を漸減し、12週間投与した。

漸減方法

【4週】 7mg/kg/day連日投与による臨床反応	【8週】 7mg/kg/day連日投与による臨床反応
・なし:試験中止	・なし:試験中止
・やや有効:連日投与を2週間継続	・やや有効:連日投与を2週間継続
・良好/非常に良好:隔日投与に漸減	・良好/非常に良好:隔日投与に漸減
	7mg/kg/day隔日投与による臨床反応
	・なし:連日投与に戻す
	・やや有効:隔日投与を継続
	・良好/非常に良好:週2回投与に漸減



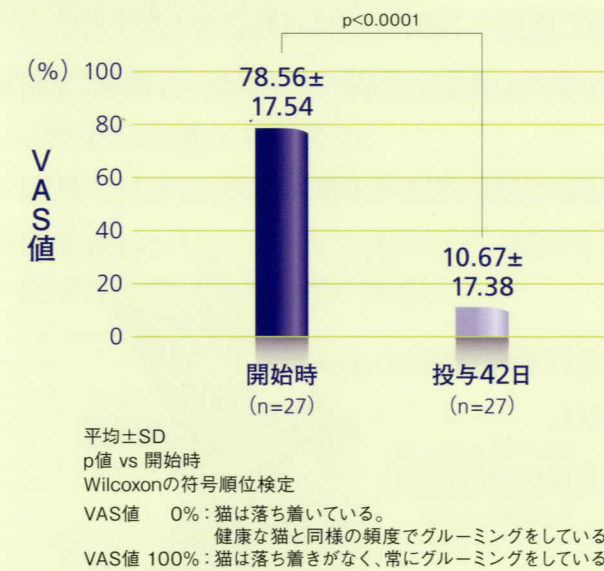
国内臨床試験⁹⁾

アトピカは開始時と比較して、痒痒を有意に改善しました。

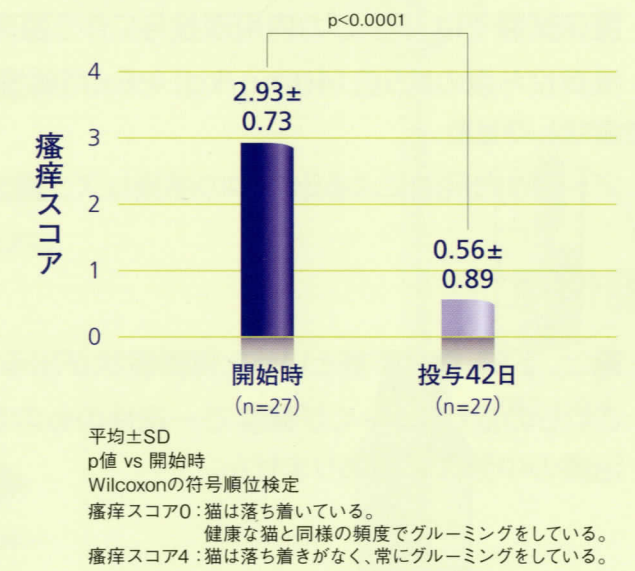
対象 粟粒性皮膚炎、顔又は頸部の表皮剥離、自己誘発性(損傷性)の脱毛、好酸球性プラークのいずれかが認められる6ヵ月齢以上、体重1.5kg以上の猫28頭(1頭は飼主が被験薬を投与できなかったために組み入れ直後に治験を中止)

方法 全ての猫をアトピカ群に割り付け、1日1回、可能な限り定時に、シクロスポリンとして基準量7.0mg/kg(範囲5.6~9.3mg/kg)を42日間(±3日)経口投与した。可能であれば、投与前に十分な時間絶食させた。

飼主による痒痒の評価

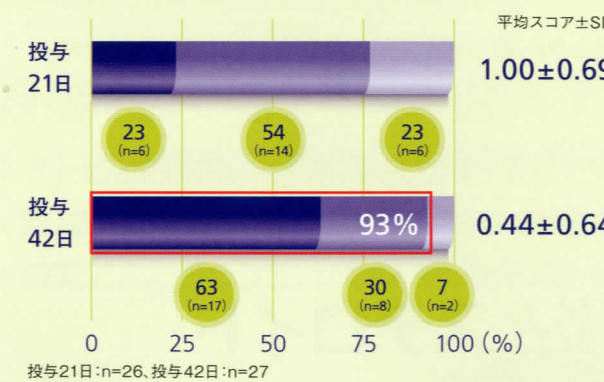


獣医師による痒痒の評価

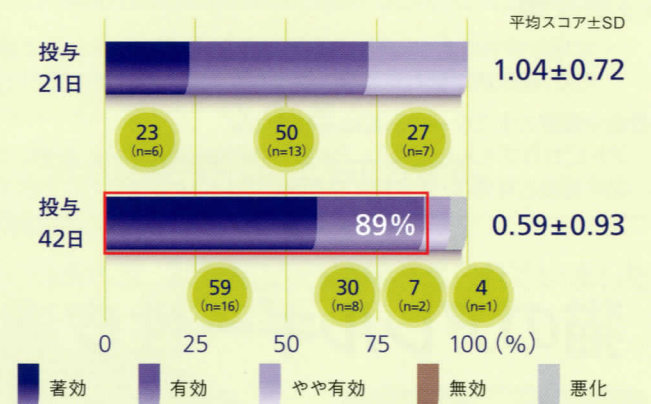


アトピカは投与42日には、飼主の93%、獣医師の89%に著効あるいは有効と判定されました。

飼主による臨床症状改善の評価



獣医師による臨床症状改善の評価



アトピカ内用液を使って猫の健康を取り戻すことで、オーナー様により大きな満足が提供できます。

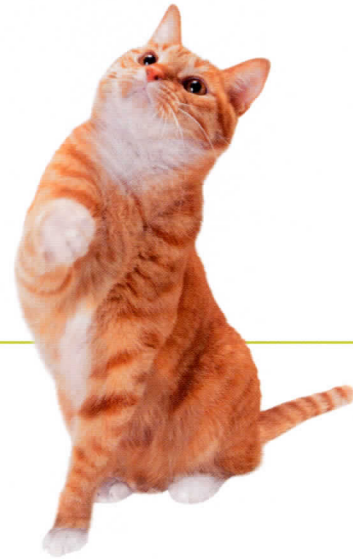
アトピカ内用液は、慢性アレルギー性皮膚炎の猫に対する長期治療のニーズに応えます⁸⁾。

安全性

- 臨床試験では、アトピカ内用液投与に伴う臨床的に重要な異常は認められませんでした。
- 推奨投与量の約5倍 (40mg/kg) を6カ月間投与しても、重要な臓器への大きな影響は見られませんでした。
- アトピカ内用液による治療中の感染リスク増加のエビデンスはありません。

副作用

- 嘔吐、下痢、食欲不振といった胃腸症状が出る場合があります。
- これらの症状は、多くが軽度で一過性のものであり、治療の中断は必要ありません。



アトピカ内用液を処方する際の考慮点

① 現在の健康状態

- ・ FeLV/FIV陰性であること。
- ・ 新生物を認めない、また悪性腫瘍の既往歴がないこと。

② トキソプラズマへの曝露

- ・ トキソプラズマへの曝露歴のない猫では、新たな曝露の機会を最小にするよう、オーナー様にアドバイスしてください。
- ・ アトピカ内用液による治療では、人獣共通感染症の原因となりうるトキソプラズマ・オオシストの排泄は増加しません。

③ 糖尿病

- ・ 本剤の投与によって膵臓β細胞からのインスリンの分泌に影響を与え、血中グルコースレベルを増加させる可能性があるため、糖尿病が疑われる猫には本剤を使用しないでください。

◎ 血中濃度のモニターの必要はありません

アトピカカプセルと同様に、アトピカ内用液の投与中は、血中シクロスポリン濃度のモニターの必要はありません。血中濃度と有効性・安全性には相関がないことが示されています。

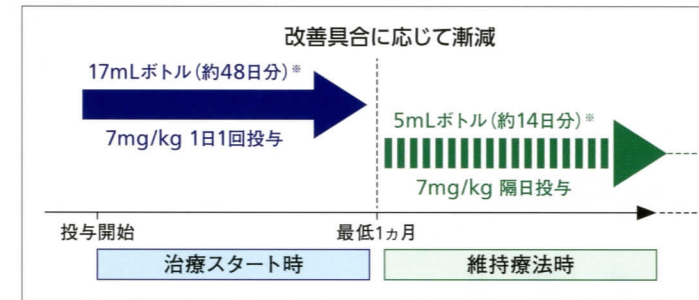
猫のアレルギー性皮膚炎とステロイド

- ステロイドが、猫のうっ血性心不全¹⁰⁻¹²⁾や糖尿病¹³⁾の原因になっているかもしれないとの研究結果があります。
- アレルギー性皮膚炎の猫に対するステロイド治療は、健康リスクを伴う可能性があります¹⁰⁻¹³⁾。
- 多くのオーナーはステロイドより代替薬を好みます¹⁴⁾。

アトピカ内用液は、アレルギー性皮膚炎の猫に対する新たな治療法です。

投与しやすいシリンジ付属の液剤で、用量調節も簡単です。

- 治療スタート用の17mLと維持療法用の5mLの2種類の包装があります。
- 目盛り付きの投与用シリンジが付属しています。
- 使用後はシリンジは水で洗浄せず、外側を清潔な紙タオルなどでふいてください。



※ 体重5kgの猫を治療した場合の目安



投与法ガイド

- 7mg/kg (0.07mL/kg) を1日1回投与する (概ね4週間程度で改善がみられる)
- その後、臨床反応に応じて投与間隔を隔日から週2回に延長する
- 症状の消失を維持できる効果的な最長投与間隔とすること



液剤なので猫に簡単に投与することができます。

- アトピカ内用液は、餌に混ぜて与えることも、口から直接与えることもできます。
- 臨床試験において投薬ができなかった猫の割合はわずか2%でした。
- 投薬できた猫のうち、1/3はアトピカを餌と共に与えられ、2/3は口から直接与えられていました。

